

## 不可思議的“毫火針”

劉恩明

香港中國中醫特色療法研究院

毫火針創始人 教授 研究員

### 【摘要】

毫火針不是針灸的工具，是中醫針灸的特色療法。

毫火針緣於中國2000多年前古老的火針。《黃帝內經》稱火針針具為“大針”、“燔針”，將火針療法稱為“粹刺”。

毫火針克服了古代火針和現代傳統火針針具的粗長，針刺深度不能量化的弊病。毫火針針體直徑為 $0.25\text{mm} \sim 0.35\text{mm}$ 3種，針長 $10\text{mm} \sim 45\text{mm}$ 7種。

毫火針的本質是灸，不是針。

針在針灸中必須具備三法則：即“用針之類，在於調氣”；“凡刺之道，氣調而止”；“刺之要，氣至而有效”。而毫火針刺入穴中，即進即出，針灸用“針”的三條法則，無一兌現。

《靈樞·官能》曰：“針所不為，灸之所宜”。《醫學入門·針灸》曰：“藥之不及，針之不到，必須灸之。”可見古人早就認識到“針”與“灸”非同一法，各司所能。

艾灸是以艾行灸，在皮膚上施熱，使熱徐徐透入皮內，是外熱效應，是外灸。

毫火針是以針行灸，灼入皮下，瞬間將熱量送入皮內，是內熱效應，是內灸。故毫火針的本質是內灸法。

毫火針是一針兩法，既有針法，又有灸法；是一針雙效，既有針效，又有灸效。針效與灸效的重疊，產生了 $1+1$ 大於2的療效。

內灸對人體具有特殊功能。

#### 1. 毫火針可“一針三氣”：

毫火針一針之下，可“得氣”，“留氣”，“氣至病所”。

進針即得氣，得氣率100%。

出針亦留氣，雖無針仍有針感，有如江河之水，針感延綿不斷。無針亦可氣至病所，故事半功倍，提高效率。

#### 2. 毫火針可調肌張力

由於“陰寒內聚、筋脈凝滯，收引，氣血閉阻不通”，使軟組織發生攣縮、粘連、增壓、板滯，從而出現肌張力增高的臨床表現。

由於氣滯、氣虛，必然帶來運血無力，血行瘀阻，使臟腑之經氣阻滯不暢，導致氣滯血瘀，使軟組織營養供給產生障礙，發生鬆軟、弛緩，萎縮，從而出現肌張力降低的臨床表現。

“氣得熱而散，血得熱而行”；熱可使筋肌舒張，血管擴容，氣血運化。氣滯血瘀得熱而解。

毫火針“以火之力”，“粹通經絡”，“爆動氣血”，疏通經絡，平衡陰陽，使“硬”的組織松解變“軟”，使“軟”的組織得於營養，提高代謝，逐漸豐滿而變“硬”。

### 3. 毫火針無須補瀉：

《紅爐點雪》曰：“虛病得火而壯者，……有溫補熱益之義也”，謂火之“補”。

《針灸聚英》曰：“蓋火針大開其孔穴，不塞其門，風邪從此而出”。謂火之“瀉”。

故火針一針之下，有補有瀉，補瀉為自身調節而非針法所為。

《針灸聚英》曰：“火針惟假火力，無補瀉虛實之害”。

毫火針臨床，辨病，不辨證；查病，不查因。不分寒熱；不拘虛實，不分型，不計補瀉。一慨而刺之，毫火針簡化了針灸臨床的程式。

毫火針的本質是以熱治病，因此毫火針操作的所有核心，就是要使針體載入最大的熱量，並安全有效的使針體上的熱量最大限度的送入穴內。故毫火針的全部操作技術，都是在實現著對穴位的內灸。

毫火針刺針可量化深淺，燒針可量化載熱多少。毫火針用針短，取穴少，實現了毫火針臨床的安全性，可操控性与可复制性。

毫火針取穴靈活，直接，無禁穴。皮、肉、筋、脈、骨、輸皆為穴。哪痛紓哪，紓上即不痛；哪爛（潰瘍）紓哪，紓上即封口；哪腫紓哪，紓上即消腫；哪漲（氣、水漲）紓哪，紓上即輕鬆；哪緊（痙縮）紓哪，紓上即松解；哪萎（萎縮）紓哪，紓上即漸豐；哪病（病灶）紓哪，紓上即得愈。

毫火針微痛，無痛苦，妇孺老幼皆可接受。是激痛點的剋星，疑難雜癥的捷徑。

## 鍼灸実技講演

# 不思議な「毫火鍼」 (翻訳版)

劉恩明

香港中国中医特色療法研究院  
毫火鍼創始者 教授 研究員

### 【抄録】

毫火鍼は、ただ鍼灸の器具ではなく、中醫鍼灸の特色療法の一つである。

毫火鍼は、約中国2000年前に《黃帝内經》の火鍼に伝承し、その時に火鍼を「大鍼」、「燔鍼」、火鍼療法稱を「焫刺」という。

毫火鍼は、古代火鍼と現代伝統火鍼鍼具の太さや長さ、鍼刺の深さを定量化することができないなどの欠点を改良し、毫火鍼を直径0.25mm～0.35mmの3種、鍼長10mm～45mmの7種を考案した。

毫火鍼の本質は、灸法であり、鍼法ではない。

鍼を用いて刺鍼を行う場合に、「用鍼之類、在於調氣」、「凡刺之道、氣調而止」、「刺之要、氣至而有效」などの3要素を備えるが、毫火鍼は、経穴に刺入し、「即進即出」をして、置鍼をしないことで、鍼灸の「鍼法」の3要素と相違する。

《靈樞·官能》には、「鍼所不為、灸之所宜」という。《醫學入門·鍼灸》には、「藥之不及、鍼之不到、必須灸之」。これで古人は「鍼」と「灸」を使い分けにしている。

艾灸とは、艾をもって灸を行い、皮膚に灸熱を与える、その熱さは徐々に皮膚内に浸透している、私は、「外熱效應」「外灸」に定義をする。

毫火鍼は、艾の代わりに鍼をもって灸を行い、直接に皮膚の中に、瞬間に熱エネルギーを送り込み、「内熱效應」に定義し、内灸ともいう。この故に「毫火鍼の本質」は「内灸法」である。

毫火鍼は、「鍼法」と「灸法」の2つを合わせ、刺鍼と灸の2つ効能を増幅して、「1+1」を2の療效より倍増した。

「毫火鍼」という「内灸法」は臨床において次の特殊効能を持っている。

#### 1. 毫火鍼は「一鍼三氣」ができる

「3氣」とは、「得氣」、「留氣」、「氣至病所」の意味である。

毫火鍼は、刺鍼の際にすぐに得氣ができ、得氣率は100%が得られる。

拔鍼の際に「留氣」ができ、「鍼感」は、皮膚内に留めて、江河の水流れのように、長く残されている、拔鍼した後に「氣至病所」ができ、故に「事半功倍、效率增加」ができる。

#### 2. 毫火鍼は筋肉張力を整える

古典では、「陰寒内聚、筋脈凝滯、取引、気血閉阻不通」、軟組織に痙攣、粘着、緊張及びこりなどの筋肉病態を引き起こす。

気滞や気虚により、瘀血を招き、臓腑や経気流注が悪く、気滞血瘀となり、軟組織の栄養供給障害を引き起こし、軟弱、弛緩、萎縮などの筋肉張力障害の症状が起きる。

古典では、「氣得熱而散、血得熱而行」という。毫火鍼の熱さで、筋肉張力の調整、血流の改善ができ、気血がスムーズに流注をして、気滞血瘀を毫火鍼の熱さで解消する。

毫火鍼は、「以火之力」により、「粹通經絡」、「激發氣血」ができる、「疏通經絡、平衡陰陽」を行い、「氣滯瘀血」となる筋組織を和らげ、「氣血不足」となる軟弱な筋組織が、正常な状態に引き戻らせる。

### 3. 毫火鍼は、補瀉を使い分けする必要がない

《紅爐點雪》には：「虛病得火而壯者、……有溫補熱益之義也、謂火之補」。

《鍼灸聚英》には：「蓋火鍼大開其孔穴、不塞其門、風邪從此而出。謂火之瀉」と記載されている。故に毫火鍼を使う場合に、補瀉法を自然に調節することができる。

《鍼灸聚英》には：「火鍼惟假火力、無補瀉虛實之害」。

毫火鍼を臨床応用する場合に、「弁病」を行い、「弁証」をせず。寒熱、虚実、弁証及び補瀉を問わず、鍼灸治療の利便さを高めた。

毫火鍼の本質は熱をもって疾病を治療することで、毫火鍼の操作の要素（最大ポイント）として、鍼体に最大の熱量を持たせて、安全かつ有效的にその鍼体の熱量を最大限度に経穴に注ぎ込み、毫火鍼手技のすべての機序は、いかに経穴の中に「内灸法」ができるかといえる。

毫火鍼は、深浅、焼き鍼の熱さの多少などの可量化ができる。毫火鍼は、短鍼を使い、取穴が少なく、臨床の安全性、使いやすさの特徴を持っている。

毫火鍼の臨床は、その治療とする目標の経穴を決めやすい。皮、肉、筋、脈、骨、輸をすべて治療の経穴となる。疼痛、潰瘍、腫脹、水腫、痙攣、萎縮などの病態を改善する効果が速く得られる。

毫火鍼は微痛を感じながら、ひどい痛苦がなく、老若男女すべてに使用することができ、激痛や頑固な病症の治療に期待されている。